

(令和元年12月22日)

## 第35回 赤松小三郎研究会のご報告

日時： 令和元. 12. 14 (土) 14:00~16:30

場所： 文京区・アカデミー茗台 7階 学習室B

出席者： 17名

### < 配布資料 >

- 資料—1 ● 岩下哲典教授の講演会内容のポイント、赤松小三郎研究会講演会のご報告
- 資料—2 ● 赤松小三郎遺品の上田市立博物館への寄託について
- 資料—3 ● 「郷友信濃・上田郷友会月報 DVD」(明治18年~平成23年)について
- 資料—4 ● 赤報隊と信濃の関係について
- 資料—5 ● 【絶賛された“逝きし世=徳川近代”と「小栗忠順」を思う~崩壊しつつある日本を憂える~】、別紙A~D
- 回覧—1 ◆ 赤松遺品の寄託関連の新聞記事(4社)
- 回覧—2 ◆ 「相楽総三とその同志」長谷川 伸、講談社学術文庫

### < 内容 >

#### 発表1. 赤報隊と信濃の関係について

発表者：沓掛忠氏

##### 1. そもそも「赤報隊」とは何か？

- ・明治維新の成立過程において、薩摩藩が時局を利用すべく赤報隊を結成させ、その結果、さんざん上手く利用し、拳句の果てに「用済みの邪魔な存在」として、頼みの官軍から「偽官軍」のレッテルを貼られ、隊の主だった指導者たちは、諏訪の地で3月の寒中、裁判にかけられず、斬殺・処刑された。それ以降は、歴史の中からは、完全に抹殺された部隊のことをいう。
- ・相楽総三(さがらそうぞう) = 赤報隊総裁、下総の富豪に生まれ、若くして国文学者、兵学者となり、早くから江戸に出て私塾を開き多くの門人を抱えていた。
- ・水野丹波 = 赤報隊隊員、佐久の神官、国文学者、兵学者(日本最初の、地雷火の発明者ともいわれている、赤松小三郎とは厚い交誼があり赤松の「火砲の実験」に際してはしばしば立会い・協力した人物)

##### 2. 赤報隊の誕生とその目的

- ・慶応3年(1867年)10月、倒幕の密勅が、薩摩藩と長州藩になされたが、大政奉還が実現したことによりそれは取り消された。しかし、あくまでも「武力倒幕を目指す西郷隆盛」は、倒幕の大義名分をなくしたため、何とかして幕府を挑発し、薩長が主体の開戦を開き武力で幕府をつぶそうとした。そこで西郷の指示により、腹心の益満休之助、伊牟田尚平、相楽総三等が中心になり、江戸の薩摩藩邸を拠点として、同志を集め、江戸・関東での大きな騒乱を計画し、実行した。その結果、庄内藩を主体とする幕府軍勢が江戸の薩摩藩邸を攻撃し、屋敷を焼き払った。(西郷たちが計画したように、幕府側に戦端を開かせることに成功した)
- ・品川沖から関西に移動した相良たちは、西郷の指示で綾小路俊実、滋野井公寿(しげのいきみひさ)が加わる東征の先方部隊に参加し、この新しい部隊名が「赤報隊」と

決まった。(慶応4年1月)

- ・同年1月12日、相楽は新政府に対し、建白書(天領の租税を軽減することにより、人民は天朝の有難さに感銘して味方し、敵を内部から弱めることができる)を提出した。太政官は、相楽の求めに応じ官軍の印を下賜し、いわゆる「年貢半減令」が出された。
- ①相楽ら草莽隊(そうもうたい)は、勤王の志士の集団であり、官軍の一部隊。  
②相楽らが「年貢半減令を人民に布告する」ことは、政府の方針に基づいたもの。  
③赤報隊は、東海道鎮撫使の指揮下におかれた。

### 3. 赤報隊及び相良総三のその後

- ・相楽たち赤報隊が東山道を進軍する中で、東海道筋の最大の朝敵と予想されていた桑名藩が、予想外に早く降伏したことをきっかけに、今までかたずをのんで様子を見ていた地方の諸大名が新政府支持を明確にしたため、そもそも財政難で戦いを始めた新政府にとっては「年貢半減令」を取り消すことになり、このことは赤報隊の利用価値が全くなくなったことを意味した。結果として赤報隊は抹殺される運命となった。
- ・新政府の当初の方針を忠実に守り、「年貢半減令」の取り消しも知らずに、農民達に半減令を布告して歩く赤報隊に対し、新政府は即刻帰還を命じたが、相楽たちはこの命令に従わなかった。これにより、相楽たち赤報隊は、官軍の名を利用し沿道住民から勝手に金品を徴収し、略奪行為をしたとして「偽官軍の烙印」を押されてしまった。
- ・東山道軍は、赤報隊捕縛命令を信州各藩に通達し、かねてから赤報隊の振る舞いに反感を募らせていた小諸藩などの近隣諸藩が連合し、赤報隊を攻撃した。これでようやく相楽は総督府へ出頭したが、隊の主だった幹部もろとも、信濃の国諏訪宿で突然捕縛されてしまった。
- ・同年3月、相楽を含む赤報隊幹部8名は、諏訪で裁判にもかけられず、処刑された。相良は享年30。
- ・その後、相楽総三は、孫の亀太郎の懸命な努力等により名誉が回復され、昭和3年(1928年)に正五位が贈られ、翌昭和4年(1929年)靖国神社に合祀された。

## 発表2.【絶賛された“逝きし世＝徳川近代”と「小栗忠順」を思う～崩壊しつつある日本を憂える～】

発表者：中野忠洋氏

1. 今回は、敬愛する「小栗忠順(上野介)」の生きた時代＝開国に激しく揺れていた江戸期幕末を、諸外国の多数の公式文書等の訳本を通じて考察した。
  - ・そこで見えてきたのは、戦争を嫌う(平和を望む)日本の文化・文明の原点は「徳川時代の江戸」＝世界の歴史上“稀に見る”260余年もの「戦争のなかった社会＝国」であるということ。それは、その後77年もの“多くの命と幸せを奪った時代”とは真逆なものだった。
  - ・当時の欧米人の外交関係者や旅行者の見聞記のほとんどが、江戸期社会を「貧しくても心豊か」「平和で幸福な民族」「国内政治はすでに十分に調和がとれていて、かつ満足している」、などと称賛している。

※参考

- ・オイレンブルク「日本遠征記」中井晶夫訳(雄松堂書店<新異国叢書上・下>1969年刊)

- ・ポンペ「日本滞在見聞記～日本における5年間」沼田・荒瀬 訳（雄松堂書店、1968年刊）

## 2. 幕末の主な欧米諸国の立場

### (1) イギリス

○侵略・属国化の本心があった

- ・日本が清国と同じ「アヘン戦争」のような侵略は出来ない国と分かってからは、一貫して、英国外交（パークス、ミットフォード、サトウの3人）は薩長土肥派“応援”の立場で頻りに密かに会って情報交換（武器商人グラバーを表に立て）を行い、英国留学・武器援助などで“革命（内乱）”を煽っていたと思える。
- ・ミットフォートの「回想録」からは、ペリーやハリスなどのアメリカ公使の日記や、オランダ・プロシア外交官らの記録（回想）のような“江戸への思い入れ、律儀な徳川武士への優しさ（記述）”はほとんど見られない。

### (2) アメリカ

○最初から「友好・通商」が至上の目的だった

- ・ペリー提督派遣にあたっての米政府・大統領の指示は「決して、戦争を起こしてはならない」であったから、ペリーの外交戦術としては“砲艦外交”であったにしろ、決して（本心は）敵対的ではなかった。

### (3) フランス

○多くの欧米諸国と同様に、ほとんど傍観

- ・少なくとも薩長側に肩入れしていない。
- ・ロッシュ公使＝ナポレオン3世時代のみ幕府を擁護した。

### (4) オランダ

○一貫した「中立・親幕」姿勢

- ・米・英・仏・露間の“駆け引き＝戦略”外交のなかでオランダの「中立・親幕」姿勢は際立っている。
- ・長崎海軍伝習所や長崎病院の指導など重要な「日本近代化」の具体的な出発を積極的に手伝ってくれた。我々日本人は、この逝きし世の“素晴らしさ”を支えてくれたのはオランダ国だったことを決して忘れてはならない。

## 3. 小栗忠順（おぐりただまさ）

- ・横須賀造船所の建設、滝野川火薬製造所及び反射炉の建設、小石川大砲製作所の建設、連合艦隊の前身である六備艦隊の構想、釜山の開発、フランス語伝習所や造船学校の設立・・・数え上げれば枚挙にいとまがない。まさに小栗は「明治の父」であった。
- ・万延元年の遣米使節団の代表として熱心に軍事施設や兵器工場を視察し、また政府高官としての交渉に臨んだ。この渡航を通じて身分制度を前提とした封建制度の矛盾を痛感し、「徳川幕府を統治機構の中心に据える国家構想」を抱く。
- ・やがて、強力な中央集権的政府（幕府）による全国諸藩の再統一＝封建制を廃して郡県制を敷き、統一国家の元首として将軍が就任するという構想を描く。
- ・戊辰戦争で抗戦を主張したが、“何ら罪なく”最期は「西軍（薩長軍）」によって斬首された。

### 報告 1～岩下哲典教授の講演会（2019.9.28 日比谷図書文化館）の概要報告・・・荻原貴氏

- （1）幕末日本の国家構想のきっかけはペリー来航ではなく、その前年のペリー来航予告情報から始まった。
- （2）赤松小三郎の国家構想
- （3）坂本龍馬の国家構想
- （4）赤松構想と坂本構想の比較
- （5）2人の暗殺をどのように考えるか
- （6）中浜万次郎（1828～1898）

### 報告 2～赤松小三郎遺品の上田市立博物館への寄託について・・・荻原貴氏

- ・これまでに、小三郎の遺品3点（八分儀、背負い式弾薬箱、ミニエー銃）を、研究会会員有志で、大阪の収集家（澤田平氏）から購入し、上田市立博物館へ寄託していて、現在上田市の予算措置を待っている状況。
- ・これら遺品以外に、小三郎直筆の測量写本等の遺品を上記収集家が保管しているので、上記3点と同様、研究会会員有志により購入し、博物館に寄託したいので、有志会員に購入資金の提供（出資）の協力をお願いしたい。

### 報告 3～「郷友信濃・上田郷友会月報 DVD」について・・・滝澤進氏

- ・明治18年から平成23年までのバックナンバーを収録したDVDを前上田郷友会代表幹事からお借りしたので、借用希望者はお申し込みください。

### ※了承事項

1. 顧問・監事について
  - ・顧問として、新たに、石井光春氏（54期）及び成田邦夫氏（56期）に委嘱することが了承されました。
  - ・監事の創設と、毛利元晶（もとまさ）氏（81期）に委嘱することが了承されました。
2. 会費について
  - ・定例研究会の会費を、実費を勘案し、500円（現行400円）とすることが了承されました。

### ※事務局より

1. 来年度講演会について
  - ・講師は、安藤優一郎氏から了承を得ている。
  - ・開催時期は、9月中旬の予定。（9月12日～13日で調整中）
2. 次回研究会について
  - ・2020年2月8日（土）午後2時から、アカデミー茗台で開催。
  - ・発表は、関良基氏による「赤松小三郎と銃」の予定。
3. 懇親会の開催
  - ・次回研究会終了後、会場近くで懇親会を開催しますので、積極的なご参加をお願いいたします。

（記録：荻原貴）